

認可図書第 136977231697872114458481028420862133302 号

しあわせガイドライン

Amane Katagiri

しあわせガイドライン

片桐天音

しあわせガイドライン

しあわせガイドライン 3

しあわせガイドライン 1

しあわせガイドライン 5

しあわせガイドライン 7

Concept: 怪物

Concept: 承認経済

Concept: スイッチを押すと私は死ぬ

あとがき

しあわせガイドライン 3

私の部屋に、レースカーテン越しの夏の日差しが降り注ぐ。精緻な影が絨毯に散らされて、つまらない光の波がゆらゆら揺れている。その動きは出来の悪い夢みたいで、章の切れ間でふと目を遣ると、シネマグラフじみた静けさと退屈さが私の脳みそをじわじわと覆っていく感覚がした。

私の右隣には、ベッドにもたれて脚を伸ばす「恋人」のサキがいて、買ってきた新刊のコミックスを読んでは潜めた笑い声を上げていた。

外の猛暑の中では元気に啼く鳥も無い。元より車通りが少ないせいもあり、エアコンも付けていない室内には時折ページを繰る音……とサキのくすくす言う声だけが小さく響いている。

「ユキ。この部屋、ちょっと暑くない？」

サキがそのまどろみを破るようにして、私に声をかけた。時折彼女が身体を揺らすと私まで視界がぐらつくくらいにびったりくっつき、それでいて暑いという。揺れた髪のが私の肩に当たるのが鬱陶しい。

「そんなに暑いのなら、離ればいいじゃない」

「くっついていなくていいの？ 『恋人』なのに」

恋人、と強調するように言ってからサキはいたずらっぽく笑った。私はベッドに本を置いて、彼女に向き直る。サキに触れていた右腕が火照っているのに気付いて、私は軽く手で撫でた。

「いくら恋人って言っても、体温調節に支障が出るまで四六時中くっついていてるものではないと思うわ」

「そうかな？ でも、ガイドラインだと推奨されてるよ」サキが取り出した小冊子の表紙には、ポップなフォントで「しあわせガイドライン」というタイトルが、その下には笑顔のカップルが何組か描かれている。

「ええ、ええ。ガイドラインは嫌ってほど読んだわ。今こうしてあなたと過ごしているのも、それのおかげだもの」

「そんなにいらいらしないですよ」

「じゃあ、学校でもないのにそんなくだらない本を持ち出してこないでほしいわね」

「でも、幸せは大事だよ？」

サキが冗談めかしてけらけら笑う。いつもは「しあわ

せガイドライン」をネタにして冗談を言い合っているはずなのけど、今日は無性に腹が立った。

「あのねえ……じゃあサキは、ガイドラインに書いてあることならなんでもするの？」

いらいらなんてしたくない。エアコンを付けたくないし、無駄な雑音だつて聞きたくない。本当はサキとも言いたいたくないのに、私の口は止まらない。

「あははっ。なにそれ」

サキが一段大きな笑い声を上げて、我ながら馬鹿なことを訊いたと思った。サキは冊子を床に放り投げて、それから私の胸に顔を埋めた。鼻が押し当てられて少しくすぐつたい。頭が揺れるたびに、ちょっとだけシャンプーの匂いがした。

「私はユキと違って、ちゃんとユキのことが好きだもん。二人きりの時くらいはくつつきたいって思ってるよ」

もごも喋るサキの「好き」という言葉にずきつとする。心に向かつてゼロ距離で語りかけられているのに、それでも彼女の「好き」は私の少し横をすり抜けていく気がした。

「ガイドラインなんてただの言い訳だつて、今更言わなきゃ分らない？」

「そうね。ごめん、言い過ぎたわ」

ちらと横を見ると、床に捨てられた冊子から、不自然なほどに張り付いた笑顔のカップルがこちらを見ているような気がした。偽物の幸せの象徴だ。

「ねえ、サキ。私はね——」

「——やっぱり、『恋人』の私といるのは嫌かな？」

背中に腕を回そうとしたあたりで、彼女が起き上がった私を見上げる。私は伸ばした手を引っ込めて彼女の視線に応えた。

サキの目はどこにも逸れずに私だけを向いていて、まるで私のことを全部見透かしてやろうとでもいうような、そういう確信めいた意思があるように見えた。

「そうじゃないの。私、ただ……」

ただ、なんだろう？ 私のことを好きでいてくれて、好きだと素直に伝えてくれる人がいる。私はそれで幸せなんだろうか。私はサキを好きになれるだろうか。

まっすぐ向き合おうとするサキに、私はなんと答える

べきなのから分らない。

「なんてね！ 冗談だよ」

そうして私が何も言わずにいると、サキが急に沈黙をかき消すようにしておどけてみせた。私はそれに応えて小さく笑ってみせる。ここからはお互い踏み込まないよ、と確かめ合うように。

もう沈黙が苦しい仲でもないはずだけど、彼女も何かが怖くて、何かを隠したいんだと思う。でも、そうやってわざとらしく強がった笑顔が、私は嫌いだ。

＊

最近、サキのことを考えて何も手につかなくなるときがある。そういう時に、エアコンが風を送る音すらもひどく耳障りに感じるがあった。

＊

「ふいー。涼しくて最高だよ」

ドアを開けると、廊下に涼しい空気が流れ込んでいくのが分かった。氷入りの麦茶を手渡すと、サキはそれを一気に半分ほど飲んでしまう。

「急にたくさん飲むと、お腹が痛くなるわよ」

私がそう言うと、サキは大丈夫だよと答えてグラスを振ってからからと鳴らす。そして、得意げな顔をしてもう半分も飲み干してしまった。

「我慢は幸せじゃないよ。ユキは幸せですか？」

「はい、幸せです。美味しいソーダがあるんだもの」

お決まりのやり取りの真似をして、くすつ、とサキが小さく笑った。

炭酸水が入った瓶に耳を当てても、封をしたままでは泡の弾ける音は聞こえない。頬が冷たくて、こののなかで時間が止まっているみたいだ。

瓶の向こうにぐにやりと歪んだサキの像が見える。どうしてか、この瓶が割れたら一緒に彼女まで消えてしまったりしないかと、少し変な想像が浮かんできた。

「私は好きじゃないなあ。ちよつと苦いし」

「味覚がお子様なんじゃない？」

「ふふっ。うん、冷たい麦茶が大好きなお子様だよ」

溶けて小さくなった氷が、からりと音を立てて沈んでまた泡が立った。くすくすと、動き出した時間を喜ぶよ

うにして。

「ん、美味しい」

グラスの底に付いた雫が、じわ、とコースターに滲んだ。サキも、こんなに透明だったら良いのに。隅から隅まで見通して、どこに気泡があつて、どこに氷があるのかを触れずに確かめられたなら。

私はサキのことを何も知らない。

ふわふわとした癬っ毛に、吸い込まれそうな瞳と、柔らかな唇。私より背が低くて小さな身体なのに、いつもその唇の端をにこりと引き上げて、どこまでも引く張ってくれそうな元気な声で私を呼ぶのだ。

細くてまっすぐな首からなだらかに続く肩のラインと、服の下に隠れた女の子らしい丸み。日に焼けた彼女の身体に、制汗剤の良い匂いをふりかけて。

私が知っているサキは、こんな外向きの彼女だけだ。ねえサキ、その中には何を秘めてるの？

突然隣にやってきた彼女は、私が好きだと言った。でも、サキは本当に私が好きなの？　ねえ、どうして笑っているの？　何がそんなに嬉しいの？　もっと色んな表情を

見ないと、サキのことが分からないよ。

サキは私と向き合う時にだけ、何かを守るようにして私に笑顔を向けるのだ。

素直に尋ねたところで、きっと、何も隠してないよと言うんだろう。彼女に触れて中を覗こうともせずに、そんな確信じみた考えが頭を支配する。

どうしたら、サキの色んな表情が見られるだろう。例えば、そうだ――

「ユキ、なんかぼーっとしてる？」

と、いつの間にかグラスを注視していたらしく、気付くとサキが私の視線を遮るようにして心配そうに覗き込んでいる。

「え、あ……な、なに？」

「ん？　考えごとしてる表情も好きだなーって」

首を傾げると髪が揺れて、またシャンプーの香りだ。

サキはここに来る前に、私に会う前に、シャワーを浴びたのだろう。私から見える彼女は何かもかが綺麗で、だからきつとそうだ。

「考えごとだなんて、そんな大したことじゃないわ」

「じゃあ、何考えてたの？」

私のことで頭がいっぱいだったのかな、と冗談めかした口調に、私は思わず口が滑ってしまふ。

「……ねえ、サキの首を締めたら、どうなるのかしら」

*

「首絞められたら、私、死んじゃうよ？」

サキが目を丸くして、少し黙って、それからやつとそう言った。ただそれだけ。

彼女は私から離れるために後ずさりするわけでもなく、細くて絞めたら千切れてしまいそうな喉元を手で守ろうするわけでもない。無自覚か、あるいは自覚的な無防備さに誘われているような気がした。

「だめ。首はだめだよ」

しかし、私のそんな視線に気付いたのか、サキは私の手を自分の膝に押し付けて動けないようにした。右手で左手を、左手で右手を。握られた手に引かれて上半身もぐいと前へ傾いてしまふ。バランスを崩しそうになるのに合わせて、ぐに、とサキの太ももに体重が掛かっていく。

「ち、違うのよ。そういうことじゃなくて」

顔がぶつかりそうになるのも気にせず、サキは手握ったまま私をじっと見つめていた。

「分かっているよ。私のこと、考えてくれてたんだよね」

いいことじゃないみたいだけど、と付け足してから、サキは私の手を離す。視線がふらふらと空中を舞った。

「もっと、ユキの考えてること……教えてよ」

そう言われてサキの細い首をちらと一瞥すると、一瞬だけ呼吸が乱れるのを自覚した。

起こした身体を戻して姿勢を正すと、彼女の首元を意識した時から、あるいはその前から、自分の心臓がいつもより速く鼓動を打っていたことに気付く。

「私、サキが何を考えてるのか分からないの」

「どういう意味？ 私はずっと、私のままだよ」

そんなことない。絶対に。

人には外からは見通せない不透明な部分がある。誰だって、私だって。サキはそういう秘密がいっぱいあるように見えるけれど、同時に私だけがその秘密を知らないような感覚に襲われることがあった。

「私、見てみたいの。あなたがどんな風に怒るのか、どんな風に泣くのか、どんな風に……」

「どんな風に、苦しむのか」

私の沈黙に合わせて、サキが付け足すように呟く。

「首を絞めたらどんな表情になるか、見てみたいの？」

想いが洪水みたいに溢れてしまつては、自分の考えがすっかり知られてしまうのを止めることはできない。それでも改めて言葉で指摘されると、じわじわと心臓を掴まれたような心地がする。

言葉を発せなくなつて、私はただこくりと頷いた。

いつの間にかエアコンは止まつていて、もう仕事を終えたとしてもいうように黙りこくつていた。確かに部屋は涼しくて過ごしやすくなつたけれど、意識せずにした沈黙が急に意識に上がつてきて、ちくちくと心をつついてその快適さを奪っていく。

「私、ちゃんと笑えてなかったかな」

そんな沈黙を破るようにして、サキがぼつりと呟いた。

「……ち、違うわ。私が勝手に思つてるだけで」

「でも、私の笑顔がユキを追ひ詰めてちやつてる」

そう言つて、にこ、と口元を動かした。

違う。サキが私のことを好きでいてくれるなら、私もサキのことをちゃんと知りたい。ただ、それだけで。

別に彼女のことが分からなくなつたつて、私が悩んで追い詰められるなんてことは……たぶん、ない。

「だから、私はサキのことを殺したいわけじゃないの」
安心して、と言うとサキがけから笑つた。

「首を絞めたいけど安心してつて、何だか面白いね」

「そう……かしら？」

「やつたこともないのに、自分はぎりぎりで自制できるんだつて信じてるみたい」

「そんなこと——」

「じゃあ、やつてみる？」

サキが鎖骨の辺りに手を置いて、首の前に差し出した。そのゆつくりとした動きがまた私の胸を高鳴らせる。暖かそうにも冷たそうにも見える肌に少しでも触れたら、私はどうにかなつてしまうかもしれない。

「あは。また、怖い目だよ。だめだめ」

「あ、ご……ごめん」

おそらくはサキの予想以上に効果のあった挑発はすぐに終わって、また私の手を引く拘束の姿勢に入った。

心がそのまま瞳に表れているのなら、こうやって無理やり顔を近づけるだけでテレパシーみたいに全部知られてしまうだろう。

「サキって、意外と変態なんだね。抑圧されてたの？」

だから私は笑顔を崩したかっただけと言おうと思っただけで、それでは最初に思い付いたのがそんな手段だったことを説明できないのも分かっている。

自分がいつの間にかおかしくなっていたのかと思うとひどく恐ろしいけど、少しだけ誇らしい感じもした。

「そうかもね。自分では分からないけど」

グラスから、小さくぶちぶちと泡の消える音がする。確かに時間は進んでいて、サキの心臓も動いている。

*

いきなりだった。

「ユキ。ちゅーしょっか？」

そう言って、サキはずいど顔を寄せてきた。さつきか

らただでさえ近かったのに、キスと言われて詰められたその距離が急に恥ずかしくなってしまう。

「顔が近くて、暑苦しいわ」

「当たり前だよ。顔を近づけないとできないもん」

私を下から見つめるサキの唇はとても柔らかそうで、したこともないキスの想像が頭を巡る。私がそんな想像をするみたいに、彼女の鼓動も速くなっているといい。

「もっと、ムードを大切にしてほしいわね」

「でも、ずっと唇見てたよね。したいんでしょ？」

そう言われて慌てて口元から目を離すと、今度はサキとぼつちりと目が合った。じっと私の視線を観察しているサキの茶色くて綺麗な瞳を意識すると、どこに目線を移動させても私が欲情しているみたいで、文字通り目のやり場に困ってしまう。

「そもそも、恋人はキスをするものだよ？」

「サキ。こんな時まで、ガイドラインの話をするの？」

「ただルールを跳ね除けるよりも、勝手気ままに使ってほうがずっといいからね」

「不真面目な活動家さんですこと」

ユキは真面目だから分からないかもね、とからかうように笑う。どういう意味か問おうと思っただけ、また煙に巻くような答えを聞くのも癪だったので、やめた。

「ええ、分かりたくもないわ」

「そうだよ。サキは、それでいいよ」

*

それから私たちは何も言わずに何度か視線を交わした。サキが私を見ているのを意識するたびに視界がぼちぼちとして、徐々に興奮していくのが自分でも分かる。どちらかが、サキか私がキスを仕掛けるための茶番じみた儀式。お互い手を使えないまま視線でやり取りをしていると、段々と瞳が熱を帯びてくる。

サキが無理やり私の唇を奪ったら、私はどうなってしまうだろう。不意打ちの責めに抵抗できなくなった私は、彼女の舌が私の気持ちいいところだけなぞっていくのに身を任せるしかないのかもしれない。

逆に、私からのキスだったら。きっと、私が目を閉じている間にサキは私の表情を見つめていて、愛おしそう

に微笑むんだ。私は微かに目を開いてからやっとそれに気付くけど、その時にはもう遅い。

目が合うたびにそういう想像が吹き上がってきて、私はとうとう下を向いてその前戯じみたやり取りを拒否した。

「ねえ、やっぱりキスはやめましようよ」

「どうして？」

「恋人のふりなのに、キスするのはおかしいわ」

誰も見ていないのに本当の恋人がするみたいなキスをしてしまったら、恋人のふりだなんて、もうそんな言い訳もできなくなってしまう。

「でも、私の色んな表情を見たいんだよね？」

だったらしちゃおうよ、と軽く言うサキに、私は何も言わずに視線で答えるふりをした。

「苦しい表情は見せてあげられないけど……私が照れている表情なら、見れると思うよ」

彼女の唇の柔らかさや吐息の暖かさを感じながら、薄目で彼女を盗み見た時のサキの表情を想像すると、頬が熱くなった。サキが言うみたいに、恥ずかしそうにキスを味わう照れた表情が見えたなら。

「ねえ、ユキ。私だつてずっと我慢してるんだから、いい加減に覚悟を決めてよ」

そう言いながら、サキは私を拘束していた両手を離すや否や私を床に押し倒す。その自由は束の間で、彼女はすぐ私の身体を覆うように四つん這いになったと思うと、あつという間にさっきと同じようにそれぞれの手で私を押さえ込んでいた。

急にバランスが崩れて、思わず小さな悲鳴を上げたときにはもう遅い。サキの指と私の指が恋人みたいに絡まって、私の手はサキと暖まった絨毯に挟まれて身動きができなくなっていた。もう片方の手はベッドのそばに押し付けられているせいで、冷たいフローリングの固さが直接伝わってくる。

これは夢じゃなくて、本当に自分の部屋で起きている現実なんだ。全身に伝わる当たり前の感覚が、身体が動かない恐怖をじわじわと増幅する。

「ちょっと、やめて。離してよ」

私より身長の小さいその身体は、本気で突き飛ばしたら受け身も取れずに尻餅をついてしまうくらいに弱いは

ずなのに。肝心の私の腕に力が入らなくて、押しのけようにも手が動かない。女の子同士なら襲われても安心だなんてサキが嘯いていたけれど、あんなの嘘じゃないか。「じゃあ、私を押しつけて。本当に嫌ならできるよね？」サキの顔が髪に隠れてよく見えない。ただその声は、いつもより静かでゆっくりとしていた。

「もう、いいわ。好きにして」

「ふふっ。ユキ、本当に可愛いよ」

私が抵抗するそぶりを見せないと分かると、サキは私の枷を外して儀式の終わりを告げた。

頬にびとつと落ちた雫を指で伸ばすと、まるで私が泣いているみたいだ。

サキが私の耳元に口を寄せたその一瞬、その思い詰めのような表情が見えて少しだけ嬉しくなる。

じゃあ、しちゃうね、ユキ。

私にだけ聞こえるような小さな声に、私は目を閉じて応えてみせる。

「ん、むっ」

サキの唇が触れる。最初は何度か、確かめるようにくつつ

けては離す。それから、ちろ、と冷たい舌が唇をなぞった。やがて舌と舌が絡み合う距離まで詰められて、何度か暖かさを分け合うと、急にころつと何かが落ちてきた。

「ふあ、冷た……」

口の中に落ちた鋭い冷たさが、舌と一緒に私を撫でる。冷たい飴はお互いの舌で段々と滑らかになっていって、最後に暖かい雫になって私の口に流れ込んでいった。

「ねえ。私のこと、ちゃんと見てよ」

必死に唇をむさぼる私をからかうようにして、サキが口元でそう囁いた。お互いに目を閉じているとばかり思っていたけど、彼女はずっと私のことを見ていたらしい。

ずるいなと思うながら目を開けると、彼女の髪はまるでカーテンみたいに私を包み込んでいて、その暗い部屋の中で私たちは見つめ合う。

薄暗いサキの表情は、いつもよりもずっと魅力的だ。

私を見つめる目が、とろんとしていてだらしない。頬だって赤いし、吐息はくすぐったいくらいに熱くて荒い。本当は私をからかっている暇なんてないはずだけど、きつと私の表情はもっと彼女に筒抜けで、だから。

夏の暑さが私たちを柔らかくところどころに溶かしているのに、そんな中で二人の舌でところかしあうキスを交わしているんだから、もうどうしようもない。

たまに見えるちよとした表情でも、まるでサキのもっと深いところを見ているような気がしてどきどきした。

「ふふっ、ユキばっかりずるい」

サキはそう言うのと、私の口から小さくなった氷を奪い取る。また、私の口でとろとろ溶かすために。

見つめ合ってキスをするのは目を瞑って味わうよりも気持ちよくて、律儀にマナーを守るために目を瞑っていたのが馬鹿らしくなった。

「んっ、ぷは……」

何度かやり取りしているうちに、氷はすっかり溶けてしまつて、とうとうふわりと消えてしまった。飴がなくなつたから終わりだよ、というようにしてサキが顔を離す。

水気たっぷりのキスだったから、二人の間につつ、と糸が引くなんてことはなかったけど、口の周りは溶けた雫でびしょびしょになっていた。

押し倒した姿勢のまま、サキが私の髪に触れてするす

ると指で撫でる。

「髪の色、違うね」

「あら、今さら？」

サキの頭が揺れるたびに、彼女の癖つ毛もゆらゆらと私の髪の上をなぞっていく。サキから見ると、二人の髪が交じった模様に見えるのだろう。

「なんか、不思議だね。瞳の色は、二人で鏡に並ばなきゃ違いが分からないし」

私の髪をもて遊ぶサキの指の動きがなかなか落ち着かない。言葉を交わさずにただ指だけがくると回っていて、お互いに何かを待っているみたいだった。

そして、その動きが止まる。

「ねえ、ユキ。もう一回、したいかも」

「……勝手にしてよ」

彼女の表情が少しだけ変わったのが分かる。えっちな顔だ。ちよつとだけ、サキに詳しくなれたのかもしれない。

「うん、勝手にする」

そう言うと、今度は炭酸水を口にして、水飴を食べさせるみたいにとろとろ流し込んでくる。

普通のキスは好みではないらしい。

「ふふ。しゅわしゅわ」

目を閉じて、私はこのまま時間が止まってしまえばいいのと思った。

キスが終わらなければ、こうしてとろけた表情を見ていることも、見られていることも後悔する時が来ないから。ぷちぷちとした炭酸の刺激に身を任せていると、私もサキも一緒になって氷水に溶けてなくなってしまう方がいいのと思うってしまう。

*

それから私たちはまた何度かキスをして、そのたびに溶けて角が丸くなった氷がサキの口に放り込まれた。暖かい液体が身体を満たしていった、頭までふわふわとした熱でいっぱいになっていく。

思考の端で、ぼんやりとエアコンが壊れていると思った。エアコンが止まっているのか、その駆動音が聞こえないくらいにキスに夢中になっているのかも分からなかったけど。

そんなことを繰り返しているうちに、とうとう麦茶のグラスは空っぽになってしまう。

「ユキの炭酸水、ぬるくなっちゃったね」

「そうね、新しいのを持ってくるわ」

思い出してみると、最初に一つ、それからグラスの半分くらいまで、四個か五個くらいは入れた気がする。

何の気なしに準備した氷が、まるで何度キスをしてほしかを伝えるいやらしい儀式みたいで、空のグラスを見ていると何だか恥ずかしくなってしまう。

初めてのキスは、私が用意した水道水の香り。そんなこと、日記には書けない。

そつとグラスを手にとると、手にほのかに冷たい雫がまとわりついた。立ち上がると、ずっと座っていたせいか少しくくらする。

「ユキが氷を三個入れてきたら、また三回できるね」

「あなたの頭の中は、そんなことばかりね」

「ユキだって、えっちな顔のままだよ」

同じことを考えていたのかと、一瞬びっくりした。

でも、サキの頬はキスの余韻が残っているみたいには

かほかで。たぶん、私もこんな表情をしてグラスを見つめていたからなのだろう。

「氷は五個入れてきて。一個多くても、少なくともだめ」

「それは、あなたの好みね？」

「うん。私の好みだよ。お願い」

「お客さんの好みなら、仕方ないわね」

そういう意味のない確認が、まるで快感に身を任せるための言い訳を欲しがってるみたいで、何だかぞくぞくしてしまう。

部屋のドアを開けると、ごう、と急にエアコンが動き始めた。

*

あのね、ユキ。

泣くのを見られたくないっていうの、あたりなんだ。泣いてるのは、幸せじゃないから。これは私の勝手なしあわせガイドラインだけど。

好きな人の前でくらい、笑顔でいたいもん。

しあわせガイドライン 1

世は空前の幸せブームである。

国民は幸せで豊かな生活を送るべきだとされ、その実現を最優先とする政策が続いた。その目標から外れた生き方は非道徳的なものとしてしばしば批判され、国だけでなく周囲からも白い目を向けられてしまう。何が幸せで、どうすると豊かなのかを国が決定する時代に入ったのである。

その結果作られたのが「しあわせガイドライン」だ。

しあわせガイドラインには、幸せとはどういうものか、幸せはどうやれば手に入れられるのかが書いてある。誰かに、国に都合が良いように。出産を奨励して国力を増すためだとか、AIが暴走した結果生まれた政策だとか、国民の幸せエネルギーを兵器に転用する研究が進んでいるのだという陰謀論じみた説さえもまことしやかに噂されるようになっていた。

多様性のためと称して片手で数えられるくらいの似たようなモデルケースが載っていて、しかもその全部が男女の仲睦まじい恋愛を含んでいる。恋愛や結婚、出産、労

働は幸せの代表例とされた。

最近になって、男性同士や女性同士のカップルもモデルケースとして加えようという議論が始まったらしい。ただし、同性同士での性交渉による妊娠や出産が可能になってから巻き起こった議論であることを鑑みれば、単に男女カップルの真似事ができるようになった新入りについての取り決めでしかないのは明らかだ。多様性の尊重に基づく進歩というわけではなかった。

本当はどこかに一つの「普通」があって、そこに瑣末なノイズが乗っているだけなのだ。

みんなが誰でもない何かに変わるのを強いられている。そういう不自然で歪な変化を、みんなが考えなしに受け入れている。

*

「——ユキさん。私と、付き合ってください」

校舎裏に呼び出された私は、その場所にふさわしく青春らしい告白を受けていた。ただ、目の前でその台詞を言っているのは、知らない生徒で。しかも、女子だった。

「あなた、私のことを知っているの？」

まず気になったのはそこだ。

目の前で私に交際を迫っているのは、夏服のセーラー服を身に纏ったごく普通の可愛らしい女子である。胸や腰のラインが人より魅力的に膨らんでいるわけでもないけれど、男ということはないだろう。

第一声で互いの性別を確認しようかとも思ったけど、冗談にしかならないのでやめた。

「うん、有名だよ。私の中では」

「真面目に答えてほしいわね」

「あはは。ごめんごめん」

彼女の旧知の友人相手なら、そのにへらとした笑顔で許してもらえるのだろうけど、初対面の私はあまり良い気分にはならなかった。

「恋人がいない謎の女とか、実はレズだとか、いろいろと噂されてるかな。たぶん」

「そう。話題になっているのは嬉しいけど、私はあなたのことを知らないの」

私がそう言うと、彼女は自分自身についての情報をす

らすらと語った。名前をサキというらしい。

「それで、サキさん。あなたは、私がレズビアンだって噂を聞いてからかいにでも来たの？」

「うーん、ちよつと違うかな」

「じゃあ、何？ 私、誰かと付き合う気はないわ」

「そうだろうねえ」

「それに私は、レズじゃないし」

「うん、たぶんそうだと思ってたよ」

どちらともつかない返事と、無遠慮な視線が私をいらさせる。珍しい動物でも見るみたいにして、一挙手一投足まで漏らさず観察されているような気分だ。

私としては、同性愛者はおろか謎の女さえも自負していたつもりはないので、サキに観察される筋合いなんてないのだけれど。

「じゃあ、もういいじゃない。私じゃなくても、もっとあなたに似合う良い男の子がいると思うわ」

「女同士で付き合うのは、良くないことかな。私、ちゃんとユキさんが好きだよ？」

「そういうの、あんまり興味ないの」

私がそう告げるのを聞くや否や、彼女はくくくつ、と声を抑えて笑っていたみたいだけど、結局我慢できなかったらしく甲高い笑い声を上げる。

「あははっ。やっぱり、そうだよな」

なんなんだ、この女は。さっきから私を馬鹿にしてばかりいる。別れの挨拶すらする気にならず、私は踵を返してその場を去ろうとした。

「ごめんね。だって、キミが——」

と、後ろからサキが私を呼び止める。思わず立ち止まってしまったけれど、彼女がそんな私を見てにやにやしているんじゃないかと思うと、また少し悔しくなる。

「だって、キミが誰とも付き合わないのは、反しあわせガイドライン活動なんだよね？」

反しあわせガイドライン活動、という言葉に私の耳が否が応にも反応してしまう。そんな言葉今まで聞いたこともなかったけど、どういう意味かはすぐに分かった。

私が振り返ってサキに正対すると、彼女は想像していたよりは真面目な表情だ。でも今は、そんなことどうでもよかった。

「あなた、何者？ しあわせガイドラインが嫌いなのか？」
「うん。キミとは少し、違うかもしれないけど」

*

「試すようなことをして、ごめんね。でも、私はユキさんが好き。からかってなんかいいよ」

それから、謎の女子生徒はおよそこんなことを告げた。私がしあわせガイドラインに真っ向から反抗して絶対に受け入れまいとする姿勢は、とても気高くて理想的だと思う。でも、一介の高校三年生が国のやり方に反抗したところで、生徒指導すら説得できずに疲弊するだけだ。

そうするくらいなら、もっと上手にしあわせガイドラインを受け流してみたらどうだろう。とりあえず、高校生活の間だけでも彼女と付き合って、周囲に恋愛をしているポーズを示してみるのはどうか。

「こんな感じで、お互いにお互いを利用してみない？」
まあ、聞いてみると悪い提案ではない。

「確かに、私にはいい話かもしれないわ。でも、あなたのメリットは？」

「私は好きなキミと一緒にいられるし、キミはしあわせガイドラインから逃げられる」

そう言って、サキは良いこと尽くめだと言うように薄い胸を張った。こんなに「好き」とはつきり言われたこともないので、私は何と答えるべきか分からない。

私が無言のまましていると、それにき、と小声で付け足した。ここだけの話というように、わざとらしく口に手を添えて。

「そろそろ、生徒指導もうるさくなってるんじゃない？」

「あなた、口説き上手なのね」

「いろいろ、準備してきてますから」

サキが自然なウインクをしてみせる。

彼女は準備、と言った。そこまでして私と付き合いたいのだろうか。なぜ？ 恋愛？ 親愛？ 分からなかった。

「でも——」

私の言葉に、サキが耳聴くぴくつと反応する。何だかそれが面白くて、私もわざとらしく手振りを付けてわざとらしくゆつくりと言葉を続けた。

「でも、私があなたを選ぶ理由はないわ。付き合うふり

をするだけなら、あなたじゃなかったっていいもの」

それこそ、わざわざ女子同士で付き合わなかったって、普通に男女のカップルを隠れ蓑にすればいいだろう。

「うーん、確かに。それはもつともだね」

「でしょう？」

サキは腕を組んで一転、思案顔になった。やっと言い負かせたかなとも思ったけど。

「その気になった男子に襲われちゃったとして、キミに撃退できるような筋力があるとは思えないけどね」

くすつ、と言って私の顔を覗き込むサキの準備の方が、一枚上手だった。

*

ガイドラインで推奨されているモデルケースみたいな幸せを掴み取りたいと思ったことはない。中学校の裁縫セツトみたいに、限られた選択肢から最も近いものを無理に選ばなくなつて、もっと自分らしい幸せがあるはずだ。クラスの男子と付き合ったりデートすること自体が嫌なわけではない。ガイドラインがなかったら、私だって

もっと「普通」に甘酸っぱい青春を送っていたかもしれない。恋愛や結婚が気持ち悪いと思ったことはないけれど、用意された選択肢から誰かと同じ人生を選び取るのを強いられるのがひどく怖かった。

あの子はどうなのだろう？ しあわせガイドラインがなかったら、私を好きになっていたのかな。少なくとも、私にこんな取引してみた告白はしなかっただろう。もっと普通の出会いをして、今頃は友達として仲良く笑っていたかもしれない。

*

「いいわ、付き合っても」

結局私は、彼女の提案を受け入れることにした。

サキと「恋人」になって、残り少ない高校生活を穏やかに過ごす。それが当面の契約だ。彼女はガイドラインに疑念を持っている仲間みたいだし、きちんとやってくれるだろう。彼女が言うには、私がサキに襲われても簡単に撃退できるみたいだし。

「ありがとう、ユキ。好きだよ」

少し心配なのは、彼女が私を「好き」だということだ。これが私の気を引くための嘘だったら何も問題ないのだけれど、そんなそぶりを見せるわけでもない。もし本当に私が好きなら、こんなお付き合いを続けることで心を壊してしまったりはしないだろうか。

誰かの「好き」に縛られるのは合理的じゃない、と思った。でも、誰かが隣にいて残りの少ない学生生活が穏やかに過ごせるなら、私は案外幸せ者なのかもしれない。「ええ。私も、あなたのことを好きに——」

「サキ。私はサキだよ。恋人同士は、あなたとかお前じゃなくて、ちゃんと名前呼び合うの」

私の言葉を遮って、しあわせガイドラインに書いてあるでしょ、と言いながら取り出すのはあの忌々しい小冊子である。けらけらと笑う様子を見ると、しあわせガイドラインを使っておどけているだけらしい。

「馬鹿ね。しあわせガイドラインから逃げようっていうのに、参考にしちゃうの？」

「ふふっ、そうでした。ごめんごめん」

彼女は一頻り笑ってから、しあわせガイドラインをま

たポケットにしまった。それから一転、少し真剣な表情になって私を見つめる。

「でも、やっぱり名前と呼んでほしいな。ガイドラインなんて関係ない。私が名前で呼ばれたいんだもん」

顔を寄せてきたサキの長いまつげが見えて、少しだけどきどきした。こうやって、誰かの顔を近くで見たことがあんまりなかったから。

「分かったわ、サキ」

「うん、ありがとう。ユキ」

*

「ねえ。サキはなんで、私が好きなの？」

「綺麗な顔、してるから？」

サキは少し考えてから、あつけらんとしてそう言った。

「でもでも、他のところもちゃんと好きだよ？ ずっとユ

キのこと見てたし」

「ふふっ。面白いことを言うのね」

「顔が好きでも、身体が好きでも、心が好きなのも全部同じだよ。そういうのに、優秀ってあるのかな？」

互いの心と心が惹かれ合った男女が付き合って、結婚まで互いに純潔を守るのが当たり前で、それが一番幸せで……そういうしあわせガイドラインを、彼女は全く気に掛けずにいる。

私はガイドラインがなければこうやって抵抗することもなかったけど、サキはガイドラインなんて気にせずに、ずっとそのまま生きてきたのだろう。

そういう違いがすぐ気に入っていた。私の知らない幸せがそこにある気がした。

「サキ。じゃあ、明日からお昼は一緒に食べましょう」

それも、しあわせガイドラインにあるんでしょ？

私がそう言うと、彼女は今日一番の笑顔になった。なかなか可愛い。

しあわせガイドライン 5

居酒屋バイト判定機は実に上手く動作していた。全体で見ればそうだろう。

*

私が持っている「しあわせガイドライン」には、こう書いてある。

幸せなみなさんのうち、満十八歳になった人は一ヶ月以内に職業適性テストを受けなければなりません。適性テストには当日のテスト結果に加え、これまでの学業や部活動の様子などが用いられます。不正を防ぐために判断基準は一部を除いて非公開になっています。

適性テストの結果はコンピュータが自動で算出します。これらの結果は、幸せなみなさんの職業選択を強制するものではなく、企業が採用活動を行うときに参考にする程度のものでしたら、安心して適性テストを受けましょう。

しかし、適性テストの結果のうち、第三十三種職業適性基準、通称「居酒屋バイト判定機」だけは、事実上「企業が採用活動を行うときに参考にする程度のもの」ではなくなっている。

居酒屋バイト判定を受けてしまうと、おそらくそれ以外の職種で採用は見込めない。つまり、テスト結果が有効な間は、居酒屋で働くか、さもなくば働くことを放棄しなければならぬ。しかし、労働は幸せを実現する重要な手段とされているから、事実上選べる選択肢は前者だけになっている。無職への風当たりは強かった。

そういった職業選択上の事情もあり、居酒屋バイト判定機に引かなかったことを知られると、それ以外の場面——当然、恋愛や結婚でも——しばしば不利益を被ることがあった。

*

どうしてサキが居酒屋バイト判定機に引かなかったのだろう。見ている限り、成績は良いとは言えないまでも大きな問題はなかったはずだ。では、明るい性格のせい

だろうか。志望学科のせい、文理選択のせい、成績のせい。判定機は点数を示してくれないので、私はこの憤りをどこにぶつけるべきかも分からない。

サキが居酒屋で働く分には問題ないだろう。彼女はどこにでも馴染める快活さがあるから。

問題は別にあるのだ。これからの私たちのこと。

あんな女の子と付き合うのはやめたほうが良い。どうせ親もまともな人間じゃないんだから、きつとろくなことになる。もっと普通に男の子と付き合いなさい。

それが幸せだからと、両親は口を揃えてそう言った。

原因は分かりきっている。サキが居酒屋バイト判定機に引っかかったからだ。そして、私が引っかからなかったからだ。

*

サキと近くの公園で待ち合わせた。彼女の誕生日から一週間後のことだ。

日暮れの公園が生ぬるい空気ではっきりになり、そこに街灯の光が差して羽虫が集まってくる。その下で、私

とサキがベンチに座っている。よくある夏の終わりの風景と違うのは、彼女が赤く目を腫らしていることか。

待ち合わせの十分前にはもうサキはそこにいて、私はうずくまる彼女を見てはいけない気がしてその場を離れた。

やって来た私を見て、彼女は——そうするのが当然であるかのように——にこりと笑って、遅かったね、と言った。わざとらしい笑顔が、今日は一段と痛々しい。

「ごめんね、ユキ。ダメだったみたい」

「サキが悪いわけじゃないわ」

居酒屋バイト判定機があるのが悪いのよ、と言うと、面白い冗談だね、と彼女はまた笑った。

「今日で、共同戦線はおしまいだね」

少し間を空けて、おしまいだよ、とさらにサキが言った。

もともと「しあわせガイドライン」から逃げるための偽装カップルなのだから、私たちが一緒にいることによって逆に不利益を被るとなれば、解消するのが当然だろう。当然なのだけれど。

「あなたは、それでいいの？」

「仕方ないよ。ユキには迷惑かけたくないし」

「私、迷惑なんかじゃないわ」

「迷惑だよ。ユキだってよく分かってるでしょ?」

家族にだって反対されちゃうし、生徒指導も受けなきゃならなくなるかもしれないんだよ。ぽつり、ぽつりとサキが続けた。

彼女もきつと家族に何か言われたのだろう。ユキは当事者だから、私よりも責められたに違いない。

「ユキのパパやママにも、迷惑がかかっちゃうんだよ」

「そんなの……」

「分かってるよね。ユキは私と違って、頭が良いもの」

しあわせガイドラインを意に介さないすっかりとした強さを持っていたように見えたサキでも、今はすっかり弱っていた。

でも、それも当然だ。一介の高校生にはどうしようもない現実なんだから。いざ向き合うとなれば、こうして疲弊するしかない。

「そんな卑下するようなこと言わないで。いつもの元気はどうしたの?」

「ユキは、強いね」

サキはそう言って寂しそうに笑う。黄昏に似合う優しい表情だと思ったけど、言わなかった。

「私は別れる気なんてないもの」

「どうして? どうして、そんなこと言うの?」

ふと、彼女の顔を見る。つうと頬に一雫流れてからは、もう決壊するしかない。ぽろ、ぽろぽろと次第に激しく溢れる涙は、きらきらと彼女の手の甲や膝に落ちていく。

サキは唇を噛んで、声を出さないように泣いている。ずっと見たかった泣き顔は、案外簡単に見ることができてしまった。こんな時に見れたって、何も嬉しくないのに。「居酒屋バイトの私となんて、一緒にいたいはずないよ」「そんなこと言わないで。しあわせガイドラインから一緒に逃げようって言ったじゃない」

「どうして? 情が湧いたの? それとも、次の相手を探すのが面倒だからかな? そうだよね、せっかく——」

ぱしっ。一瞬、何の音か分からなかったけど、目の前でサキの涙が散る。思わず手が出ていた。

痛い。いたい。苦しい。手が痛い。心が痛い。「ばかっ!」

頬に付いた赤い跡は、彼女の言葉を遮るには十分すぎた。サキはひどく驚いた顔で、私を見ていた。

「なんで、叩くの……？」

「あ、いや、違うの……私、そんな……」

「私だって、ユキのこと好きなのに。ただ、ユキの幸せを考えて……私が退けば、ユキが幸せで……」

サキはどうとう、声を上げて泣き出してしまった。私もそれにつられて、ぼろぼろと流れる涙を止められない。私も、サキが好きなのに。なんで、なんで、なんで。

「ユキ……私が嫌い？ 嫌いだから、叩くの？」

「違う。違うわ。私、サキがひどいことを言うから……」

サキが私の胸に飛び込んで、泣きじゃくる。私はどうすればいいか分からないまま、定まらない手つきで彼女の髪を撫でることしかできない。

「じゃあ、好き？ 好きって、言ってよ……」

「サキ。ねえ、サキ。好き、好きよ。だから……別れるなんて、言わないで……」

「好き……ユキ、好きだよ。もっと、もっと強く抱いて」
彼女の頭に手を回して胸に押し付けると、サキの泣く

声が心臓に直接響いてくる。その叫び声にも似た歌が、私をもっと悲しくさせた。

*

「……ごめん。言い過ぎた」

「私も、感情的になりすぎたわ」

赤く目を腫らしたサキが、やつと落ち着きを取り戻す。私はまだ、ちよつと突付かれたらすぐに涙が零れてしまいそうだけど。

「ちゃんと、待つてくれる？ 私が居酒屋バイトじゃなくなる日まで」

「ええ、きつと。誓うわ」

次の検査は、最短で三年後。彼女だけが居酒屋バイト判定機に引かかってしまった今となっては、卒業後に同棲するのも難しくなった。それまでの間、サキは居酒屋バイトであり続ける必要があるし、私は大学に通いながらサキの帰りを待ち続けなければならない。

それが長いのか短いのか、私にはよく分からない。今はとても長くなるだろうと思ってるけど、きつと振り返っ

てみると短かったと思うはずだ。

「サキ、好きよ」

「うん、ありがと。私もユキが大好きだよ」

熱い視線がぶつかって、私たちはどちらからともなく唇を重ねた。ゆっくり舌を絡めて、歯をなぞる。互いの感触を忘れないように、口約束に判を押すように。

暖かい彼女の頬からいつもより悲しい味が舌に伝わって、それを舐めとる私まで感情が溢れてしまいそうだった。

「私たちは、自分が思ってるよりずっと弱いよ」

「でも、また会えるわ。きっと」

そうだね、と言って笑ってみせるサキ。その拍子に、目の端から涙がつつ、と一雫だけ流れていった。

それから私たちは、辺りがすっかり暗くなるまでずっと手を繋いでいた。何も言わずに、最後になるかもしれない穏やかな時間を味わうようにして。

*

「そろそろお別れしないとね」

立ち上がって、そっとお互いの身体に腕を回す。脆くて弱い二人が壊れてしまわないように、優しく力を込めた。

「ユキは、幸せでしたか？」

「はい、幸せでした。サキと出会えて。とても」

彼女はずっと、私の胸で声を出さずに泣いている。せめてサキを抱きとめる私は絶対に泣くまいと思ったけど、そんなの無理だった。

いっそ私も、居酒屋バイトになればよかったのに。

しあわせガイドライン 7

あれから私は大学生になって、実家を離れて一人暮らしを始めた。サキとは「別れた」から、卒業してからもう連絡を取っていない。

何度か夏を過ごしているうちに、夜の公園でじっとベンチに座って誰かを思うこともなくなった。

大学生活はそれなりに楽しいし、週に何度かはサークルで仲の良い友達とご飯を食べに行ったりしている。講義だってしっかりと出席しているし、成績だってそんなに悪くない。

サキのいない世界はそれなりによく回っていて、私はもう彼女なしでやっていけるのではないかと思うこともある。日常の隙間に少しだけ残った空っぽの部分にわざわざ目を向けさえしなければ、だけど。

*

遅くまで起きている夜は、私が孤独であることを思い知らされる。私の隣から空っぽの部分の滲み出てきて、じ

わじわ周りを包み込んでいくのをただ感じていると、最後には私まで空っぽになってしまふ。

私はサキがそんなに好きだったのだろうか。

誰かに——サキに——私の何かを埋めて欲しいと思っている。あるいは、何かに——何でも良いから——私を慰めて欲しいと思っている。

彼女たちだってそれなりに仲は良いけれど、その唇や、その髪に特別な意味を持って手を伸ばすことはできない。もし誰かに触れることができたなら、私はサキを忘れるのだろうか。

私がサキを「好き」だと思っているのは、その程度の意味しかないのかもしれない。それでも、みんなが当たり前のように受け入れているしあわせガイドラインからずっと逃げてきた私には、今さら何事もなかったかのようにならないうにガイドラインに寄りかかる勇氣はなかった。

*

サークルの新歓で、居酒屋に行くのだという。飲み会で居酒屋に行くことは何度かあったけれど、い

つもその場所に行くまで憂鬱な気持ちが消えない。一瞬だけでも彼女のことを思い出してしまうからだ。もしもこの街で働いていたらどうしよう、もしもばったり会ってしまったらどうしよう。そう思うこと自体はたぶん悪いことではないけれど、そんな事情を知らずに楽しそうにしている今日の前にいる友人たちに悪い気がした。

もし全国にあるたくさんの居酒屋の一つにサキがいたとしても、偶然その店を選び取ることはないだろう。そんなことがあるのなら、むしろ運命なのかもしれない。

*

お酒は好きだ。ふわふわとした心地がする。

氷が唇に当たると気持ち良くて、いつもそのまま口に放り込んで溶かしてしまう。薄くなった氷をかりりと噛むと、飴みたいに碎けてすぐに消えていく。酔いが回っている時はいつもより早く飴が無くなってしまう気がして、子供みたいに何度もグラスを叩いて頬張っていた。

綺麗な水で作った氷は綺麗だけど、口に何も風味が残らなくて少しだけ物足りない。だから、本当は家で飲む

お酒が一番好きだ。

今年の新入生は穏やかでいい子そうだな。私はもう直に引退してしまうので、あまり関係ないんだけど。みんなが自由に好きな時間を過ごしていて、こういう安心できる時間にお酒を飲むと少しだけでもよく酔える。

それなのに今日は、ほとんど酔った感じがしない。アルコールだけは身体を回っていて、どうしてか妙な焦燥感と気持ち悪さで胸がいっぱいになった。

*

不思議な予感、すぐに的中することになる。

「ユキ……だよね。久しぶり」

お手洗いをすると、背中から懐かしい声がする。誰ですか、とは訊かなかった。訊かなくても分かった。

「ここで働いてたのね、サキ。元気だった？」

私は一瞬動けなくなつて、ハンカチをしまおうとするその姿勢のまま、独白のように空中に向かって話しかける。驚きと歓喜と、少しの緊張を隠して平静を装った私の声は、それでも少し震えていた。

「私はずっと元氣だよ。ユキのこと、ずっと考えてた」
 思い切って振り返ると、あの頃よりも少し大人びたサ
 キが立っている。

汚れの目立たなそうな黒い作務衣に、店のロゴの入っ
 た紺の前掛けをしたサキは、えへへ、と軽く声を出して
 笑った。若さだけでどこまでも連れて行ってくれそうな
 昔の元氣は感じ取れなかったけど、その表情は私が知っ
 ているサキそのものだ。

「私だって。サキのことを忘れたことはないわ」

「あのね。私、そろそろ検査を受けなおせるんだよ」

「ええ。もうすぐ誕生日だものね」

サキのいう検査というのは、職業適性テストのことだ。
 彼女を拘束して、私と引き離れた居酒屋バイト判定機。

大学に進学してからもずっと頭を離れずにいたその最
 悪のシステムは、少なからず私の研究テーマに影響を与
 えていた。

「それでちゃんとした結果が出れば、また付き合えるね」

「……なによ、それ」

サキの言葉を聞いて、私は少しいらした。

「私は、居酒屋バイトだからって別れたわけじゃないわ」
 「うん。知ってるよ」

居酒屋バイトだからって避けていたわけではない。た
 だ、サキとの約束を守っていただけで。

そもそも、彼女が居酒屋バイト判定機から逃れるのは
 難しいだろう。居酒屋バイト判定機は、一度陽性と判定
 した対象を再び陽性と判定する割合が非常に高いことが
 知られている。特定の職業に就くとその職業適性基準を
 満たしやすくなるのは当然なのだけれど、それでは十分
 に説明できない面もあった。

「今だって、すぐにサキの手を引いて連れて帰りたいと
 思ってるわ。検査なんて関係なしに」

「あはは、ありがと。でも、やっぱりサキは私の——」

*

と、突然後ろから低い声がした。

「おい、 ！ 知り合いか？」

「あ、 さん。はい、高校……その、友人で」

今、サキをなんと呼んだ？ 聞き取れなくて私は一瞬耳

を疑った。呼び名と思われる部分はどの音も曖昧で、むしろ鳴き声のように聞こえたのだ。

ヨ……もしくは、キ、だろうか？ 次の音も、ウともオともつかない何とも気味の悪い発音である。

怖い、と思った。私の知らない発音を聞き取って、お互いにコミュニケーションを成立させている二人が、どうしても私と同じ人間とは思えなかった。

私が怪訝そうな表情をしているのに何を思ったのか、サキは笑顔で男を手で示して口を開く。

「ユキ、こちら店長の■■■■さんだよ」

自分の名前が理解できる音で耳に響く安心感と、耳が拒否する不気味な音が生み出す言いようのない恐怖感が同時に襲い掛かってくる。それなりの覚悟を持っていたけれど、目の前ではつきりと口の動きを見てしまつてくらくらとした。

居酒屋バイトには、お互いをあだ名で呼びあつて信頼関係を深めるといふ文化があると聞いたことがある。何度か居酒屋に行ったことはあるけれど、彼らがどんな風呼び合っているかに耳を傾けたことはなかった。本当

はどの店員も、こうして鳴き声のような何かでやり取りしているのだろうか。

店長と紹介された男は、それから私が聞き取れる日本語を一言か二言だけ放つてから仕事に戻つていった。

「店長、見た目はアレだけど悪い人じゃないんだよ？」

「そ、そうなの」

「うん。■■■■さん、この前は——」

「じゃ、じゃあ……急いでるから。またね、サキ」

次にその音を耳に入れると気が狂つてしまいそうで、もう無理やりにでも会話を遮つてその場を去らずにはいられなかった。

「うん……そっか。じゃあね、ユキ」

私は何事もなかったかのように軽く手を振つてその場を足早に去りながらも、心臓はばくばくとその鼓動を速めるばかりで、気を抜くと脚が震えて歩けなくなつてしまいそうだ。足がもつれて転んでしまわないように、一歩ずつ前に進んだ。

ねえ、サキ。あなたは誰になつてしまったの？

私がサキに向けている目は、高校の時みたいに綺麗な

ものじゃなくなっただと思う。彼女はそれに見合うくらい、もつとずつと汚くなっただろうか。

*

ふらふらと家に帰って玄関に座り込んだ時には、私はもうすっかり疲れ切っていた。

サキがいて、私が見ていたけれど、私は誰を見ていたのだろう。その視線に、しあわせガイドラインをしっかり脳みそに吸い込ませたあとの子供のような、無邪気な汚さを自覚した。だからもう、私は彼女と一緒にいることはできない。

もしサキが居酒屋バイト判定機から逃れられたとしても、きつとそれは変わらないだろう。

「変わったのは、私？ それとも、サキ？」

もう、何もかもがだめになってしまった。しあわせガイドラインはこうして人を幸せにするのだろうか。

逃げたとしても、受け入れたとしても、最後に振り返った時にはいつもしあわせガイドラインが私たちを見下ろしているのだ。逃げ切れなかったことを悟らせるように、

逃げようなんて思いが芽生えないように。

しあわせガイドラインが生み出した居酒屋バイト判定機が、一番憎むべきだった最悪の概念が、いつの間にか私の心に根を張って視界を曇らせている。

「どうして？ ねえサキ、どうしてあなたはこんな風になってしまったの？ 気持ち、悪い……」

高校時代の自由で魅力的だったサキと、私とは違う世界で違うことばを使っているサキが、もう同じ人間には見えなかった。

そうだとしたら、誰もしあわせガイドラインを捨てようとしないう理由がやっと分かった気がする。

気付くと私は、引越しのダンボールに乱雑に放り込まれてそのままになっていたしあわせガイドラインを、まるで聖書を紛失した狂信者のように探し回っていた。これまでどこかに置いてきた幸せを取り戻したいとでもいうようにして。

「どうすれば、いいの？ どうすれば、幸せに……」

ぱらぱらとページをめくりながら、何度か挿絵のインクがじわりと滲むのを見て、私はやっと自分が泣いてい

るのに気付いた。表紙のカップルがみんな私を見物してあざ笑っているような気がして、見つめているうちに視界がぐにやりと歪んでいく。

いつの間にか私は、自分が一番嫌いなしあわせガイドラインなしでは自分自身の幸せさえも支えられなくなっていたのだ。

「さよなら、サキ。本当に好きだったわ」

さよなら、サキ。お互い「しあわせ」になりましたよね。



ここにあなたのしあわせガイドラインを書いてよい

Concept: 怪物

「ママがね、本当は私は人間じゃないって言うの」

B子が急にそう言った。私は彼女が人間じゃないことを知ってたし、B子だってそんなことはとっくの昔に知っていたと思っていた。

B子と、私やその他大勢の人間との間には無視できない違いがたくさんあった。彼女にも当然それは分かっていたけど、ただの個性の差だと教わってきたのだという。「それが、どうかしたの?」

「だって、A子ちゃんは人間だよな? 私のことを本当は怖い怪物だって思ってたら、すごく嫌だよ」

「私、あなたが人間じゃないって最初から知ってるよ? たぶん、みんなもそうだと思うけど」

B子はまず啞然として、それからびっくりした表情になって、最後に顔を赤らめた。知ってるなら早く言っよ、と拗ねる姿が可愛らしい。

彼女と最初に交わした会話を、今でも覚えている。

「朝起きると体中に粘膜張ってるから、シャワー浴びないとダメだよ、ね、そうだよな……?」

人外なりのジョークだと思って、その場ではみんな笑っていた。でも、それからみんなはあまりB子と話さなくなった。やっぱりノリが合わないよ、と言っていたけど、人間かどうかってそんなに大事なことかな。

こんなに素直だと、誰かに騙されやしないかと少し心配になる。今は私にこんなに懐いてくれてるけど、本能ではもっと逞しいオスを求めているのかもしれない。

B子にキスをして、とろとろになったところを弄ると、彼女はすっかり自分が人間であることを忘れたような表情をして私に甘く噛み付いてくる。ベッドに押し倒して身体を押さえつけながらキスをする、獣のような声で甘えるのだ。

こうやって誰かに縛られたがるのも、メスの動物的な本能なんだろう。私みたいな女じゃなくて、粗暴なオスに組み伏せられたら彼女はどんな表情をするだろう。その時に、私の助けを求めて叫んでくれたらいいのに。

彼女が隣りにいない時は、たまに理由もなく怖くなる。私にメスを蹂躪するための醜悪な性器が付いていればよかったのにと、いつも思っている。

Concept: 承認経済

人間が生きていくためには、十分な食料と睡眠が必要だ。でももし、それらが無条件に満たされるようになったとしたらどうなるだろう？

お金と物質的な豊かさが全く関係なくなつてから、わざわざお金を欲しがめる人は前より少なくなつた。ほとんどの国では通貨が廃止されてしまい、必死に旧通貨を集めてやり取りしているのは、承認本位制を受け入れられない特殊な経済圏の人たちくらいである。あとは古銭マニアとか、そのくらい。

無限の生産能力の獲得と同時に、ベーシックインカムとして承認——特に、一定量の承認と交換できる承認兌換券——が支給されるようになってから、世界は承認経済の時代に入った。

承認の使い方は個人に委ねられる。銀行に行けば、承認兌換券と交換に一人で使うには十分すぎる量の承認を受け取ることができる。それを使って自分の承認欲求を満たしても良いし、交換せずに兌換券を支払手段として用いることも当然禁止されていない。

例えば、同人誌即売会。どんな弱小サークルでも無料で出版ができるようになったので、そこはすぐに承認のマーケットと化した。承認を直接服用することはもちろん、氷漬けになった承認を兌換券として大量に集めることはそれだけで相当な快感だという。

承認欲求を十分に満たして自己実現を求める者もいたけれど、承認をざくざくとかき集める快感から抜け出せるケースはそう多くなかった。世はまさに、承認モンスター of 魍魎跋扈である。

夜になるとよく、紙に承認を巻いて吸っている中年男性が街を歩いている。二他家三本吸い終わると、少しだけ元氣そうな顔をして家に帰っていくのだ。

他人をあつと言わせる素晴らしい能力がなくなつて、毎日少しずつ服用できるくらいのベーシックインカム分の承認は保障されている。

「ねえ、おじさん。ちよつと遊ばない？」

でも、私はそういう可哀想なおじさんから、なけなしの承認をすっかり搾り取つて絶望させるのが楽しくてしょうがない。私も、承認モンスターだから。

Concept: スイッチを押すと私は死ぬ

横断歩道の白い部分を踏み外すと、鮫に食べられて死んでしまう。影だけを踏んで歩かないと、太陽に身体を焼かれて焼け死んでしまう。

そういうごっこ遊びを、かつてしていた。

「死んだスイッチ？」

「うん。死んだスイッチ」

配線に繋がっていて役割を持ったスイッチは、生きたスイッチ。まだ役割を与えられていないまっさらで飾り気のないスイッチは、まだ死んでいる。

「だから、これが死んだスイッチ？」

B子は軽く首肯したけど、私には何を言っているのかよく分からなかった。

スイッチを押すと、かちと小気味いい音がする。よく見ると、白くて平たいボタンの横に赤い色をした丸い穴があって、たぶん配線して電気を流すと光るのだろう。何度か押していると、指に急にぴりっとした刺激が走る。整然と並んだ数本の端子が指に刺さって血が出ていた。

「危ないよ、A子。死んだスイッチは端子が出てる」

そう言って、B子は私の指を舐める。何度か傷に舌が当たって甘い痛みが走った。

B子が言うことには、死んだスイッチには新しい機能を割り当てることができるという。生きているわけでもないから、まるでゾンビみたいだ。

「例えば、『このスイッチを押すとA子は死ぬ』とか」

「物騒なこと言わないでよ」

私は手でくるくる弄んでいたスイッチを、間違って押してしまわないようにゆっくり机に返した。

B子は冗談だと言って笑ったけど、そんな縁起の悪い冗談はやめてほしい。

「今、悩んでるでしょう？ 悩んで悩んで、それでも解決しなかったら、最後に押してみて」

「そういう遊び？」

「ほんとだよ。ほんとに、死ぬの」

取り出してきた赤いチェックのピンクッションに、B子が綺麗な甲虫みたいなスイッチをぷす、と刺した。

「だから、ね？」

私と一緒にいるのが嫌になったら、押すといいよ。

あとがき

こんにちは。今日は八月十日。あなたはいつだろう？
最近、きちんと自分の性癖と見つめ合うために、新しいペンネームを作る試みをしている。ゲームによって名義を変える声優はこんな気持ちでやっていたのだろうかと思うと、少し落ち込んでしまう。

さて、本編について少し。

しあわせガイドラインは、ディストピアじみた作品を書こうという試みから生まれた。実は、執筆予定だった複数の短編作品を「しあわせガイドライン」という何とも迷惑な概念で統合した話になっていて、作品でかなり重要な要素となる居酒屋バイト判定機はそれら短編作品の一つである。

百合作品かと問われると正直分からない。世の中の百合作家はあんなに自信を持って百合作品を出しているわけだが。

実際に居酒屋でアルバイトをしている方、していた方にとってはかなり不愉快な作品となっているかもしれないが、私なりのディストピアの結果である。何らかの職

業が不当に蔑まれたり、差別の対象になるのは、市民の幸福を（強制的に）求めるディストピアにはかなりありがちなことではないかと思う。

Concept は文字通り構想の出力であり、読者の皆さんお待ちかねの予告編であり、同時に私を縛る縄でもある。今後優先的に執筆する予定の作品のアイデアを掲載した。「怪物」は昨年の冬コミ前から放置していたアイデアである。「承認経済」はごく最近思い付いたもの、「スイッチを押すと私は死ぬ」は二月頃から考えていたものである。これらの一部は拙サイトのリポトリにてイシューとして列挙されている¹。ただし、サイトにて公開となるか書籍となるかはまだ未定である。

なお、最下層存在としての「きつねさん」について拙く作品も鋭意執筆中なので、続報をしばし待たれよ。

最後に、居酒屋バイト判定機のアイディアは、あるツイートを参考にした。あとがきの場を借りて感謝します。ありがとう。

¹ <https://github.com/amane-katagiri/amane.jp/issues>

² <https://twitter.com/i/statuses/865029687427663872>

ここからしあわせガイドラインを送ることができます

<https://goo.gl/forms/kE60LG7GEVsiuQq92>

ここまでしあわせガイドラインを送ることができます

-
- ◆書名 しあわせガイドライン
 - ◆発行者 片桐天音
 - ◆発行 変態美少女ふいろそふい。
 - ◆発行日 2017/08/13
 - ◆印刷者 株式会社エーディーピー
 - ◆連絡先 circlemaster@hentaigirls.net

表紙イラストを含む全ての作品は CC BY 4.0 でライセンスされており、ライセンスの条件に従っている限り自由に利用できます。CC BY 4.0 の詳細は以下の URL で確認できます。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

変態美少女ふいろそふい。